

日本書紀傳

十九卷
五

五十三

和 一〇五二二 號

内閣文庫		
番號	和	10522
冊數	156 (62)	
函號	特	85 1



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



教
文
庫
印
省

青
政
庫

青
政
庫

日本書紀傳十九之五
紙員五拾六葉
九月三日按了三輪彦助

下
口
子
五
印
日

内一三六八三號

天足彦國押人命七世孫云云之後者と有と同族とを
を思合中可し然れ此中臣臣ハ中臣九臣多りけむ
丸字を脱せざる者を見えたり此等の中臣某も異姓
の中より中臣部として使われし事ありけむ
始れ少む事右に云る ○天兒屋命ハ上 百七十 註
三氏の中臣又異多る 五下
るか如く兒屋ハ借字ありて八意思兼神とも申奉る
八意を例及りて意弥り義よりむ有けり備其意と
云ふ本凝凝り義に出たり借其を靈と云ふ
傳七十五 八十三と云ふ租云るが如く靈と云ふ全体
は充滿たる義よりて廣きを心と云ふ時一箇の固
凝り所有り其指り所甚切なるむ有けり今此を譬へ
て云む八洲起元章と以天之瓊矛指下而探之是獲

○日本書紀傳十七

○二百十四

滄溟を靈と見自
疑島を心と見て是
なり猶幸と論
さむ

滄溟其矛鋒滴瀝之潮凝成一島名之曰磯馭廬鳩と見え
たりは大同類聚方曰此登乃美乃奈連流半自免波安
津 神靈。水 火氣。二
萬都美陀麻美豆保乃許乃不多通乎加波也保豆祢奈
理云云奈流と有を合せて云ふ人身の成水と始とハ
国土の成始を云ふり天津御靈ハ右の天之瓊矛あり
水火氣の二ハ由は滄溟あり交合ハ矛を指下して探
るるの秀龍ハ神經より心即是なり皆其天之瓊矛
を指下して探る中より水火氣の共ハ全身ハ其靈の
行足り凝り島ハ成り心を其中に掣り置るなり
此を以て靈ハ遍くして廣く心ハ其に指べき所有ハ

て甚狭しと云ふり
但靈と心との差別ハ中より此
ハ本凝の義は出たる由を知せむとて如此ハ譬へた
るなり其まし由緒ハ傳二十二卷興台産靈神の下
命より傳を立て云ハ心ハ許と呂と訓心と事
正しく記記共ハ歌ハ在り論無ハ古事記高津宮段
大御歌ハ政毛牟迦布許許素陀迹迦と有る万葉二十九
丁ハ肝向心字痛と有る心と同トハ真福寺本又古
本ハ如此く許許と有り又第三一書ハ出たる興台
産靈神の興台ハ心足ふるを下り興台此云許語等と
注せり古今集詞書ハ許ニ知煩くして有る知ハ語
助ふれば其ハ許ハ心なり此ハ俗ハ多く心地と書

く事ふれども知ん地字の義も非ず右の心を許して
 云々謹より又万葉二十三十一二下二妹之心者を以て戒去
 二里波と詠古今集甲斐歌二心無を氣に禮那久と
 有る此二ハ東歌よりハ記れりふれども去二里ハ僅
 小呂を理と云換れりゆえなり傳十五二百二下二註せり
 瑞珠盟約章ハ田心姫命ハ更なり姓氏録右京日四所
 出たる屋主田心命ふゆハ心を許理と訓と又和名抄
 海菜類ハ大凝菜本朝式云凝海藻古留毛波俗用心大
 二字云古二呂布止楊氏漢語抄云大凝菜と見えたる
 ふど心ハ凝ハ謂ゆる事ふむ知るれなりけり俗ハ物
 事ハ深

く心を入て成すを許流と云ひ又他人ハ惡し行ハ
 有つるを戒めけり微るを許良類と云ハ心為と云事ふ
 可く又傳十五卷百五十二下稜威之噴讓ハ下ハ心
 引る万葉十四ハ波伴ハ許呂波要なり噴ハ人ハ心
 を何し心ハ揉る又具本ハ許ハ呂多を許と云
 由多を思ふ可し
 此許流と云事右ハ如く多るを又許と云云て
 心ハ事と成り大同類聚方ハ心ハ事を奈可吳と云
 二ハ中心ハ義多り又心藏ハ事を南喫囉波無祿知武
 差乃奈伽母仁阿剌哈知志保伽門又伊路免奈訶吳表
 弘差无報乃解乃淫穢檄離登と見えたる是より又傳
 六八下二註せり如く天御柱を心御柱と云ハ又劔莖
 中心と云ふハハ許是より皆心を許と云るより

又右ハ和名抄大
 凝菜の語ハ於期菜と
 云有ハ許能理と訓
 ハ此ハ大凝菜と義
 此ハ凝を許と云

又四十足日本能
石根許具思美

▲又三石全之概
木敷山尔十三
石根乃與敷敷道
平又三石根之許
敷敷道之十七
一許具思美可毛
伊波能可年佐
備

又言ハ心音より事ハ心取より異ハ心外より好ハ心
祈より媚ハ心振より恋ハ心經より此等を以て心を
許と云を知心一又万葉三十一盤全之擬敷山七十
神左振磐根已擬敷有る擬字を一ハ許畧と訓
此一ハ許と用しるを以て上云る如く擬を許理と
し許ととも許とも云て心字の訓と異ふるざるを合
せ考ふ可き者より一又神代本紀云天八百日尊と
並びたるハ疑ハし神名不分明八十萬魂と云ふ
てハ編生天神とハ有れども此天兒屋命の亦名を混
りたる者と云むも知れざるなり又天孫本紀云
物部騰咋宿禰と云人名有る騰ハ伎毛より咋ハ疑
みて騰太く疑たる由るなり其子ハ五十琴宿禰と

見_ル原_ノ圖_ヲ
天津_ノ命_ト
唯_ニ御_ノ紀_ノ良_ク
本_ハ何_レ也_ト
兒_ノ屋_ノ根_ノ命_ト

云有ハ膽心利ヲ義多可ク借此御紀ハ更より古事
記古語拾遺又其餘ハ天兒屋命有兒屋ハ許夜
也訓心より如此申し天意八命ノ義多事右ノ
註を見テ知てより上百八十引る春夜神記ハ
天兒屋命津国島下郡壽久山天降坐と有ハ天神御子
の供奉り給ひて天降坐し後より姑く任じ御在し
坐はる事と聞えたるハ神名式ニ撰津国島下郡須久
久神社二座歟見えたる是即天兒屋命ノ御社なる
ハ和名枚郷名又同国島上郡兒屋有リ其社ノ立止
給へる島下郡ノ境を攝へたる地理を以て考ふる古

其邊より猶神地あり有けり又、壽久山より天降坐
て後、其神の棲居坐し、其の由に依て然る郷名
より遺りたる者あり可し如何し有れ其神の由に縁
水之地名、**見屋**なるを以て天見屋命の**見屋**正しく
許夜と訓申す可し慥なる微にて、有るなりけり但後
下は舊に撰津國昆陽野に有る昆陽其神の由有る
地名より其野に集る葦の葉の隠れに位
津國の昆陽野の頭は冬に來りけりふと歌枕に多
在る昆陽池昆陽野(3)は是より其の河邊にあり見屋
郷より九六七里と西南に隔る其の同ト
す中宿神宮雜例集に天年十二年庚辰四月五日春日
御社奉遷壽久山御社は右大臣大中臣清麻呂公致仕
籠居撰津國壽久山御社之向位家近所奉崇也と見由備
然るに春日御社に其庚辰より九年の後神護愛
雲二年戊申に始て鎮坐れり大和より日てハ有る

す右の春日神記に依て思ふに天見屋命の始て天
降坐し、右の壽久山ありつるを其より右の**見屋**
郷に御在り坐けり故に神名を以て地名とも呼し
程の事あり其間甚く久しう少くも清麻呂公其壽
久々の籠居坐し就て始て天降坐し由緒不詳有
を以て久し見屋の神地を改めて此に移奉るに
あり可し然るに俗に天見屋命を春日神と云ふ社に
任る云ふより實に見屋に在りて天見屋命(4)の御社
を其壽久山に遷奉れ又天見屋命を文德天皇實錄三
代實錄等に天見屋根命と有る始として世に唱ふる
も皆見屋といふ云々見屋根と云ふり春日祭詞に天之
子八根命姓氏錄ありと悉く天見屋根命と録され
たり情此根と不言に記傳八九下に稱名あり例殊に
多しと云ふにこれ根に依り例と異ふ可し

其ハ此神ノ御子ヲ天押雲根命ト申テ押ハ大ノ義ハ
由己ニ傳十五二百二ニ誤ルカ如ク雲根ハ心思根
トテ此ハ御父ハ意思兼神ノ御功ニ継給フ由多ク其
子天種子命ノ種子ハ足根心タリネノ義あり可ク如此ク子
孫三世共ニ御名ヲ負セテ事必其故由有由可ク者不
少故思ふニ此根ハ上二百ニ引テ天孫降臨章第二ニ
書ク天兒屋命主神事之宗源也故俾以太占之卜事而
奉仕焉ト有テ神事ハ神祇ノ情態多ク宗源トハ其源
根ヲ探知テ事あり此ハ思兼神深謀遠慮ト有テ是ハ
ハ亀卜祭文ニ吾者能知上國地下天神地祇况復人情

憤悒哉ト有テ合世曉テ可ク猶瑞珠盟約章ニ天照
大神勅曰原其物根則云々又出仁天皇二十五年御紀
ニ載テ大倭大神ノ御言ニ雖祭祀神祇微細未探其
源根以留於枝葉ト見えたり皆右ノ宗源モトを云不
クを引合セテ見屋根ノ根をも思ふ可ク有由ハ
然ルハ見屋根ト申シテ存心足レハ神事ノ根源を思慮
シ得テ世御在ニ坐テ意ヲ有レハ右ノ天兒屋
命如ク根字ノ加リ々々を以テ舊ク訓來ルニ任メ見
屋を見屋根ノ如ク訓レテむヨリ違ハ事有テトク
けテハ四記傳ニ伝書ニハ多クハ見屋根ノ根字ヲ添
テ書クヲ記共ニ此字無ヲ思ハ根ノ字無

さハ古夜と訓てさハ思ていし屋を夜泥と云事
今俗語のさハ万葉四巻ふいし有るハ猶古
夜泥と訓てさハ云水たし但上は云る如く根を流す
し許夜と云む誤水と云るハ相通ハして訓
心さあり情又右の宗源又源根と云ハ母登と訓む所
あるが其を根日義と取るハ海宮遊行章第三一書ハ
貧窮之本飢饉之始因若之根と有る本と始と根とを
合せ對入たる是より倍此神名と事とを記傳日天兒屋
命ハ招祖^添ハ招ハ書紀日幸招禱と有る是より此神
今布刀詔戸言白しハ太御神を招禱奉給ひし故日此
名を負坐るふと可し祖ハ玉祖と云る祖名ハ
て例殊日多しと云れたる招ハ然^レ有る玉祖と云る
如何祖とハ其子孫ハ職を傳ふと云る玉祖と云る
其祖業を子孫ハ持てり日對して云稱あり此神ハ行
事を傳て其子孫ハ中臣氏即中臣ハ職を以て神ハ
君と御中を取申中事ハ有れり招禱ハ此時ハ神
ハ限れる事あるが故日古事記御天降段と云るハ
其遠岐斯八尺句瓊鏡云と云る其事ハ神ハ如く云
れ其事ハ祖と云る云るハ亦ハ其者ハ四倍今此
下説るハ古史第百三十三段微日兒屋命日兒屋ハ八

意思兼神ハ人意と同義なる由を考へて云る云ハ
れ説り有る驚るはれ出来れ説ふ所ハ即師説
と云て可なりやまむ但古史傳ハ未世日出づ水
ハ其日合りや合ぶるや知る由無れハ如此書留置て
其出^レを持て予ハ非^レ○遠祖ハ苗裔^ハ對して稱あり
ハ改^レし削^レり爲^レす
天孫降臨^ハ章第一^ハ一書より上祖と書るハ海宮遊行章
ハ本祖と作られたる皆同訓あり万葉十八^{二十}大
伴能遠部神祖乃其名于^大謀^東見^目又中臣壽詞日中臣乃
遠部祖天兒屋根命^ハ有^レ水^ハ實^ハ登^レ富都於夜と訓
心さあり此我より子子より孫孫より曾孫曾孫より
玄孫と云遠ハ名稱ハ有る事不れども其より末を幾
述て云日さし其世継を教を云て用無^レ祈^ル商^ハ

〇云々如く我より上あるは然して親の先（父母を親と云其）祖（オホナリ）父（オホナリ）祖（オホナリ）母（オホナリ）と云ハ大父大母の義あり其先を曾祖父（オホナリ）曾祖母（オホナリ）と云ハ大ニ父大ニ母の義あり其先を高祖父高祖母と云字ハ有れは皇國の言ハ曾祖父母とて盡るが故ニ和名秋高祖父の所より引テ日本紀上祖和名止保皇於夜と有り然ハ其五世祖より上方ハ此を幾紀の祖と云ずしハ廣く唯遠祖と公然（オホナリ）云ふ古の定格より有ける者と所見なり又子孫の方も然して和名孫和名夜之波古とい有れは姓氏録の文法を考る日某神子某命又ハ某神孫某命と有て其よりハ三世孫四世孫など計テ曾孫玄孫を云ハ又幾世と詳ふるぶるハ唯後也と云る後ハ即裔の事より

神武天皇二年御紀ハ苗裔と有を傍ニ後也と書せる是より古語拾遺ニ裔字を多く用ひテ波都古と訓ニ名義秋ニ其字を保加てハ保登理とハ波都牟麻古とハ波都古とい有テ波都牟麻古ハ裔孫波都古ハ端子の義あり及を以テ此遠祖ニ義を明くも可し〇忌部ハ此よりハ氏の忌部を云テ下ニ忌部神と見えたる其を職ニ忌部とて其差別有る事上（百九十）七下（七）中臣連（下）云るハ如し第二一書より忌部遠祖太玉者造幣と見え第三一書より忌部首遠祖太玉命と有テ此ハ首の姓見えたる少天孫降臨章第一一書より忌部上祖太玉命と有り古事記同段ニ布ノ玉命者忌部首等之祖と有テ右ニ同ト云る古語拾遺ニ天太玉命齋部宿祢祖也と見

元姓氏錄

右京神別
上天神

齋部宿禰高皇產靈命子天太玉

命之後也。有「字」を齋部と改むる、其二書共ニ延

曆以後又成れる者あり。日本逸史ニ延曆二十

正六位上忌部宿禰濱成等改忌部為齋部と有る記

傳より引て此の唯字を改めたるなり。凡て古の姓名

ありし文字ハ心ヲ隨せて書るを此頃ハ已ニ其も定

まるりしハ齋部と書し其神ヲ率給てり。此ハ

皆忌部と作るを以て見れば其本末ハ混れ無くし

む用意とす所見たけり。清和天皇實錄ニ貞觀十一

年十一月廿九日癸丑晦神祚大祐正六位上忌部宿禰

高善為齋部其先出自
高神魂命と見えたり。記傳十五九下。忌部首ハ伊美

辨能意毘登と訓べし。此ハ諸忌部を率て其長なる由

の姓より自の職を以て名くるものハ非ず。杖中臣氏ハ

ど即其職を以て名くるものハ異なりと云れたり。然

れども供作ら此を率る其長として仕奉りし即職

よと謂ゆる以行事負名と云者も此ハ中臣の例は異

ありざる可し。故其長と有る證ハ上百五十一引て論

つゝ入るが如く古語拾遺此段始此段宜令太玉命率諸部

神造和幣と有る其下も神武天皇段下令天富命率

供作諸氏造大幣と有る照應テラ不所あるが古事記此

種々物者布刀玉命布刀御幣登取持而と有る此時の

太御幣ハ想て太玉命の事執給へるを思ふ。宣和幣

の造給ハむや始と出たる和幣の下と訓注無し。

公又具諸部神也
其忌部之言即長
上之部也其忌部
一供作は奉る謂
るる也

次は出たる青和幣の下は古語亦伎氏と註せるを思
ふるも上は造和幣と有ハ誤る事知るなり然れ
ハ右に引る文ハ次は供作る諸部神の事を云ふ大綱
の所あるに正は直念^{太玉神}諸部神造幣帛と無て叶ハ
る所多きを先思ふ可し備太玉命を此は忌部神と見
えたる忌ハ齋戒の事なり其長と^{在て諸部神の處に給ふ}坐け太玉命の行事
なり部ハ其神の部と成て供作る諸部神の職あるを
合して忌部神とい^{申す事ハ猶}其諸部神の長官と云むか如く
む有ける後世忌部と云ふ氏名と成れるも本此は起
れる者なり故記傳にも引れたる同書の始は太玉

命所率神名曰天日鷲命所波国忌
也彦狹知命部祖也
筑紫伊勢西^{部祖也}櫛明玉命^{出雲国玉}天日一箇命
国忌部祖也先云置て次は此警戸段は仍令石凝姥
神天豫戸命之子取天香山銅以鑄日像之鏡令長白羽
鏡作速祖也
神伊勢国麻績祖今俗衣種麻以為青和幣^{古語ハ}令天
日鷲神造木綿以津咋見神穀木種殖之以作白和幣^是
綿也以上二物令天羽槌雄神^{倭文遠}織文布令天棚機
一夜蕃茂也
姬神織神衣所謂和衣^{古語ハ}令櫛明玉神作八坂瓊五
百箇御統玉令下手置帆負彦狹知二神以天御量^{大小介}
伐大峽小峽之材而造瑞殿^{古語美良能}兼作御笠及矛

角令天目一箇神作雜刀斧及鐵鐸古語佐其物既畢略
 令太玉命捧持祢讀見之此中石凝姥神長白
 羽神津作見神天羽槌雄神天棚機姬神等五神ハ右
 太玉命所率神有外ハ此上引カ如ク
 此始令太玉率諸部神造和幣和幣有カ其故
 其最初仍字を置テ太玉命之處分ハ依テ事を明セ
 右等ハ神等ハ其諸部神カ其カ者カ其カ
 有ケル然レハ其ハ差別カ有テ其ハ上
 太玉命所率神名云々有テ神等ハ元々
 祖神カ其カ出テ五神ハ其幣帛を作カ其
 諸部神カ其カ有テ外ハ其カ功カ其カ
 生テ其カ太玉命カ其カ故カ其カ所率カ

公其神武天皇殿令
 天富命率諸部神
 氏作種之神室鏡玉
 牙角不綿麻等見
 天目又其瑞垣朝
 殿之淵畏神或曰不
 交故更令齋部齋
 石凝姥神天目一箇
 神角三氏更鑄鏡
 造齋有カ其カ
 著

神カ其カ御在シ生カ備又其御天降既又勅曰吾則起
 樹天津神籬神籬者古語及天津磐境當為吾孫奉齋矣
 汝天見受命太玉命二神且持天津神籬降於葦原中國亦
 為吾孫奉齋焉略且太玉命率諸部神供奉其職如天上
 儀仍令諸神陪從見之ハ天社國社を定メテ令
 持齋給ふ御事カ其神祇令其祈年月次祭者百官
 集神祇官中臣宣祝詞忌部班幣帛見之天壤共
 二易カ其カ常典カ其カ祈年祭月次祭等詞カ
 辭別忌部能弱肩能太多須支取掛能持由麻波利仕奉
 留幣帛能神主祝部等受賜能事不過捧持奉能宣カ有

又大嘗祭詞此と同出たり又太神宮豊後
宮等神嘗祭詞常毛進流九月之神嘗乃大幣帛
字云云字為使忌部弱肩太襦取懸持齋理令捧比
進給布御命字申給久申有ふ日由麻波利忌部
の忌同言し物を清く忌慎謂あり其高
橋氏文御饌仕奉之事を始甚味清造欲供御食と
有中天津御食字齋忌取持天と見え次慎勤仕
奉止仰賜と受け終伊波此由麻天供御食有り
此を照し心得むふ忌部の義自灼け
在殿内祭有元太玉命供奉之儀齋部之所職也有其
む一備又拾遺神武天皇段天富命率諸齋部云云

陳其幣物殿祭祝詞其祝詞文有其家行事不
在於別卷
之詞皇御孫之命乃御殿字今奥山乃大峽小峽尔
立留木字齋部能齋斧字以伐採比木末波山神尔祭比
中門字持出來比齋鉏字以齋柱立比云云齋玉作等戎
持齋波持淨麻波造仕留瑞八尺瓊能御吹支五百都
御統乃玉尔云云物事齋之云言を冠申すも
皆忌敬し清まり供奉由り記傳忌部と
ハ神を祭種の物を造又然くて九齋之潔
清まり事を為職を云りて云はり是るり
太神宮式物忌九人父九人云事有此を儀式帳
に稽ふる大物忌父宮守物忌宮守物忌父地

祭物忌地祭物忌父酒作物忌酒作物忌父瀧祭物忌
 瀧祭物忌父神鹽燒物忌御塩燒物忌父土師置作物忌
 土師置作物忌父山向物忌山向物忌父有物忌
 物忌父有物忌其各職掌を記せる所其職任
 之日より忌敬に供奉由云々此の諸の忌部
 傍佛に事より太神宮式に物忌父死其子解任子死
 者父亦解任有之此の物忌の義を盡せる者より
 又内人の中忌鍛冶内人云々忌と云々皆右の例
 あり故此の事、猶古語拾遺神武天皇段に建部檀
 原經營帝宅仍令天富命太玉命率手置帆負彦狹知二
 神之孫以齋斧齋鉏始採山林構正殿中略故其商今在
 記伊国名草郡御木鹿香二御古語正殿採材齋部所居
 謂之御木造殿齋部所居謂之鹿香是其證也と有る上
 引る太玉命の事跡の本著る者より已に御天降段

宜太玉命率諸部神供奉其職如天上儀仍令諸神亦與
 陪從と見えれば高千穂宮以來の舊儀を傳集たる
 者より今始れり非れば此天皇の中洲に大
 宮敷給ふ初より故に殊更に云々者あり儲下に凡
 奉造神殿者皆須依神代之職齋部官率御木鹿香二御齋
 部伐以齋斧堀以齋鉏然後工夫下手造畢之後齋部殿
 祭及内祭訖乃所御坐而造御勢宮及大嘗由紀主基宮
 皆不預齋部所造也と有る上より古傳あり此の
 其故實違へる今其状をむめて廣成主の畜憤
 を撫へられたる文ありあり
其伊勢宮の事、太神宮式
採正殿心柱祭條、右造宮

使忌部自率内人并役夫等就山木本祭之レの之有レ鎮祭宮地條レ右鎮祭畢地祭物忌清掃其地掘心柱レ宛称且立柱云々有レをむめレ凡レの者多レり大殿祭詞レに齋部能齋芥字以成採任云々齋鉏字以齋柱立氏レに見えレハ齋日然レ言ふレ又其大嘗宮の事ハ祭式日造酒見先執齋鉏始掃地并掘院四角柱垣云々託造酒見先執齋芥始伐木然後諸工下字レ有レ是ふレ其事ハ上五十九下云々如レ齋部氏の職ふる事ハ本レ論無レ其造酒見又其神武天皇の預めレ仕奉レ由有レ段日令天富命率齋部諸氏作種レ神宝鏡玉矛盾水綿麻茅と有レ上日引レ此磐戸段レ始レ思兼神深思遠ミテクララ愿議日宜令太玉神率諸部神造和幣レ有レ職を兼絶水たレ者多レ其下日又令天富命レ供作諸氏造レ作大幣託レ天種子命レ命天兒屋命之孫解除天眾國眾事略レ尔乃立靈時於

鳥見山中天富命陳幣祝詞裡レ祀皇天褊秩群望以答神祇之恩焉是以中臣齋部二氏俱掌祠祀之職レ見レ元九下御紀日四年春二月壬戌朔甲申詔日我皇祖之靈也自天降鑒光助朕躬今諸虜已平海内無事可以郊祀天神レ申大孝也乃立靈時於鳥見山中其地号日上小野捧原下小野捧原用祭皇祖天神焉レ有レ時日御事不レ少備其ハ海内靜謐日成水レ就レ高千穗宮より以レ來恒例レトレ仕奉レ來水レ恒レ祀レ起レ給レるレ多レけ小具ハ大幣レ云レハ太幣帛多レ事上日云レ如レふレ凡レ富昔大幣レ云レけレハ祈年祭日幣帛を云レるレ文

武天皇御紀云大室二年二月戊戌朔庚戌是日為大幣馳驛追諸國國造等入京見之同六月日下在山背國乙訓郡火雷神每早祈雨頻有微驗宜入大幣及月次幣例之有祈年月次之並祈多之是以知心此程ハ中洲宮ニ初國所知有御世日始之天社國社在未定也世御在坐す至ふゆハ然る靈時を備け幣を陳せ給へり後日神祇官日於班幣の日ハ百官齋して即朝廷の祭祀ふる同ハ事二月ハ祈年月より大幣ハ祈年月幣ふるを思ふ可くふむ有けり四時奈式祈年奈條ニ前祭十五日充忌

部八人木工一人令造供神調度但報者報編氏作捨木者讚岐國送納前祭五日令木工當曹忌部官一人監造若曹内無忌部官人及神部之内忌部不定人者兼取諸司充之見元九是あり月次新嘗等奈也此日准ふと雖も其ハ奈之所限有祈年ノ頒幣ハ在田々天下の諸神日巨事ハ故ニ殊ニ大幣と云ふりけり其捨木ノ事ハ拾遺ニ久手置帆負命之孫造牙等其高今分在讚岐國每年調庸之外貢八百竿是其事等證也有り臨時奈式ハ九様木千二百四十四竿讚岐國十一月以前又右日引る建都檀原經營帝宅略其物既備天富命寧諸齋部捧持天璽鏡劔奉安正殿云云有ハ其神武天皇御紀云辛酉年春正月庚

天下ニ造大幣者亦須依神代之職當部之官率供作諸儀准例造備然則神祇官神部者可有中臣齋部棟木鏡作云作神祇保文麻鏡等云云ニ格違見云云云云見云云

辰朔天皇即帝位於檀原宮と有る御時之事は神祇
令に允踐祚之日中臣奏天神之壽詞忌部上神璽之鏡
鏡釵と有る是より即持統天皇四年御紀の春正月戊
寅朔物部蘇呂朝臣樹大角神祇伯中臣大島朝臣讀天
神壽詞畢忌部宿祢色夫知奉上神璽鏡於皇后皇后
即天皇位と見えたり此の神事より非れども此磐戸
隱の時中臣神の廣厚稱辭して祈啓し忌部神の諸
部神を率て太幣帛を備作る事と依りて御
あり若し其鏡の石凝姥神釵の天目一箇神玉の拂明
玉神の遺給ふ所より皆太玉命の率給へる神等と

捧持

るの事ならず其時太玉命の太幣帛を取捧け
せ給へり所由は緑山の事云々更なり其の磐戸殿
極天香山之五百箇真賢木而上枝懸玉中枝懸鏡下枝
懸青和幣白和幣令太玉命稱讚亦令天兒皇命相副祈
禱と有り然るに此の更なり紀記共々釵を云ふは
別の子細有る事なり其の上百六十一丁は己云々
か如又當此之時帝之與神其際未遠同殿共床以此為
常故神物官物亦未分別宮内之藏号齋藏令齋部氏永
任其職と有て天富命の其齋藏を預り仕奉るれは不
水の朝廷の貢賦神祇の幣帛ふと出納の齋部氏の
職として仕奉る水は然るに至る後磐余推擲朝
三韓貢獻突也無絶齋藏之傍更建内藏分収官物仍令

令河知使主與百濟王仁記其出納始更定藏部と見え
たに此に於て神物と官物と始て別るに至れり若
て其齋藏の物ハ臨時奈式と所見たる諸國の神祝供
神の調度はあり内藏の物ハ職員令内藏寮條と所見
たる金銀珠玉宝器錦綾綵氎褥諸蕃貢獻奇倚之物年
料供進御服別勅之物と云類よて即天皇の御物是を
少神宮及諸社に進らるるを内藏寮官幣と云ハ御物
を御直に進くせ給ふ御當ハ神祇官の幣帛と云ハ本
より別るに雖も神物官物未分別と云ハ一向忌部
氏の職より可けれハ此に至りて忌部の職掌稍く衰

公其次に至る於小治田
朝太云之亂不絶帶
天恩與亮徒絶
供其職之云云計り
故實之陳申すべし

ハ初けりと所見たるあり又至る於長谷朝倉朝云云自
此而後諸國貢調年々盈溢更立大藏令藤我麻智宿禰
檢校三藏齋藏内奈氏出納其物東西文氏勅録其簿に
有る此に至りて齋藏の出納勅録の權を蕃の奈氏に
奪ハれたるありハ愈其衰の極せれるありを廣成主
の歎き思ハれりハ其下風より在る古き少く
皇政に令天下富命率供作諸氏造作大幣託令天種子命
解除天深回罪事と有ハ解除と係り見たり可き所
少然るに神祇令に九六月十二月晦日大板東西文部
上祓り讀祓詞託百官男女衆集祓所中臣宣祓詞卜部
為解除と有る文部が祓詞ハ漢文にて怪し者あり
忌部氏の職を奪ハれたるあり可し其ハ日本後紀大
同元年八月庚午先是中臣忌部兩氏各有相訐と云

所忌部此の預^レと為^ル令^レ除^ル右の文を引^ル必由^ル所無^ク為^ル可^ク事云^レ更^ニ然^ルを拾遺
秦漢二氏及百濟文氏等^ノ姓忌^トを云^フ所^ニ蓋^シ與^テ齋
部共預齋藏事^ヲ因^テ以^テ為^ス姓也^ト今東西文氏^ノ故^レ被^レ蓋^ス亦此
之^レ緣也^ト書^シて^ハ止^ム不^レ可^ク也^ト此^ノ主^ト似^テ合^ス一^ト也^ト
さ^レ言^フる^ニ齋部ハ中臣^ト相^レ並^ビて^ハ古^ノより^ハ貴^シ姓
あり^テ然^ルを^レ歸^シ化^シ蕃^種ノ^ハ氏^ノ旗^ト共^ニ使^リ奉^ル事^ハ
可惜^ク神^ノ亂^レを^レ禱^シ一^ノ齋^ノ中^ニ云^フ者^ヲ上^ニ朝^廷ノ^ハ御^過失^ハ
下^ニ其^ノ家^ノ大^ニ多^ク瑛^鏗ある^ヲ未^レ其^ノ醉^リ醒^ルふ^レ可^ク
こ^ノ神^ノ代^リ故^レ實^ニハ^ハ飽^シて^ハ毒^ヲ一^ノ大人^ノ坐^シせ^ル也^ト
内^ニ華^夷を^レ分^ツ事^ニ又^テ于^テ難^ク波^長柄^豊前^朝白^鳳四年
ハ^ハ疎^ク少^ク也^ト以^テ小^宰下^諱齋^部首^作賀^斯拜^神官^頭
今^ハ神^祇令^レ掌^レ叙^レ王^伯也^ト族^官内^禮儀^婚姻^卜筮^事夏^冬二^季御^卜之^式始^起此^時
作^賀斯^之亂^不能^絶其^職陵^遂衰^微以^至今^ト有^ル白^鳳
ハ^ハ天^武天^皇ノ^御世^号也^ハ白^雉を^誤れ^ル可^ク

御紀を見^ル其^ノ白^雉四年^ノ所^ニ見^無く^テ大
化元年七月^ノ所^ニ先^祭鎮^神祇^然後^應議^政事^是日^遣
倭^漢直^比羅^夫於^尾張^國忌^部首^子麻^呂於^美濃^國課^供
神^之幣^ト有^ル神^祇令^レ元^大嘗^者每^世一^年國^司行^事
と見^えた^ル是^レを^レ悠^紀主^基ノ^國郡^を卜^定め^テ供^神
ノ^幣を^課せ^テ被^遣た^ル倭^漢直^ハ上^ニ引^ル所^也
知^使主^ノ後^又拾^遺ニ^與齋^部預^齋藏^事ト^有ル^其た^だ
日^甚不^足ぬ^事多^ク也^ト此^ノ日^ハ共^ニ課^幣ノ^事預^此
る^此一^事を^以テ^富音^忌部^ノ盛^ル少^ク事^知ル^也
又^二年^七月^ノ下^官ヲ^破偷^ル所^也忌^部木^巢中^臣連^正月^亦有^過也^ト

見えては此ハ神官頭疑無キ一ハ非水也其ハ素ヨリ
神祇ノ事ヲ預ル仕奉ル忌部氏也此ハ然ル有ル也
を其ヨリ叙王族ハ職員令ニ依リ正親司ヲ掌皇親
名籍事ト有リ宮内禮儀武部省ノ掌内廷官名帳ヲ課禮儀云々事ト見ルノ内禮司ヲ掌宮内禮儀禁察
非違ト有リ婚姻ハ治部省ハ掌本姓純嗣婚姻云々事
ト有リト筮ハ陰陽寮ハ陰陽師六人掌占筮相地ト有
テ其大化二年ニ改新ノ詔有リ古來ノ御政を改メ
給ヒテ諸官を被置テ雖モ未然ニ官々を儲給不迄
ニ至ルモ一ハ神祇伯あり兼掌れり故ニ殊
更ニ右ニ如ク並舉ルレタルニ夏冬二季御ト云

ハ四時奈式ニ載ル六月十二日下御體神日辰ノ御體保美麻ヲ謂
由リ御體御ト事ありテ奏御上儀ニ中臣二人折ト
宮主一人下部八人ノ名見之且天孫降臨章第二ノ一書
ハ天兒皇命主神事之宗源者也俾以太占之卜事而奉
社焉ト有リテ其祖神ノ所縁を以テモ忌部氏ノ預ル
所ハ非水ハ古ヨリ定日無リ一ハ夏冬兩度ニ定行不
事を奏請テ其式を始ルハ有ル也有ル也職員
令ニ神祇官伯一人掌神祇祭祀祝部神戶名籍大嘗
鎮魂御巫ト北惣判官事ト見えたり然水ハ古ト筮ハ義解ト下灼ハ龜
也北灼龜縱横之文也ト有リト北ノ事ト右ト引リ
陰陽師ノ事トハ非可一神祇官下部二十人義解御會有

其被官たるあり備皇極天皇三年御紀に中臣錦
子連拜神祇伯再三固辞不就称疾退居三島と有り其
翌年御紀作入鹿を誅し給ふ時功臣ふか故に孝德
天皇御紀に中臣天下の大政を仕奉る水しハ神
祇伯に無事ふかハ濟世置給ふハを漸白雉四年に
至りて作賀斯を神官頭と拜し給ひけり依り其五年
天皇崩御少坐しハ其事停むかハ神祇官の事密仁
ハ漏さ水たりけりハ有れ此神祇官の事密仁
ハ有れハ已く神祇官と云稱有しありけり建体天
皇元年御紀に遺神祇伯等敬祭神祇求天皇息光答民
望天皇曰可矣ハ見ハ欽明天皇十六年御紀に昔在天
皇大泊瀬之世云ハ命神祇伯敬受策於神祇と有ハ雄
略天皇御紀の事を云ふハ其祿有ハ甚古下代の事
あり備天武天皇御紀に申年ハ所ハ忌部首子人と云
有り此時日王の遠忌部ハ首ハ姓ハ有ハあり同
ト人の事を其九年正月の下ハ是日忌部首子首賜姓

丁丑朔甲申の

皇下年三月の第
忌部連子首と有
此二天子字を
今改て引たり

曰連與弟色布共悦拜と有り此時始て連の姓ハ被
成ハありハけ少此を記傳十五六十一今本ハ子首の
子字脱たり上文ハ子人と見え續紀に養老二年正月
庚子詔後從四位下忌部宿祢子人從四位上と有と同人
より子首をハ古昆登と訓ハ天武天皇御紀の大正
輪真上田子人と云人をハ文武天皇御紀にハ見首と
書ハハハ同ト色布ハ其大宝元年南都宿祢色布知と有
人の事子ハ補意と云ハハ又其天武天皇十三年御紀
ハ十二月戊寅朔己卯忌部連賜姓曰宿祢と見ハ記傳
日王干洋御原朝改天下萬姓而分為八等唯序當年之

勞不本天降之績其二曰朝臣以賜中臣氏命以大刀三
 曰宿祢以賜齋部氏命以小刀之有以中臣忌部と神代
 より相並びたり氏より忌部氏の一考殿されたり
 を歎きたるありと有り當年之功を以て壬申年の功勞
 を云ふあり天降之績とハ上二百二十四下二引る拾遺亦宜
 大玉命率諸部神供奉其職如天上儀と有り如く天兒
 皇命と相並びて仕奉るれし中より大玉命ハ供作諸
 氏を率ると仕奉るれし其状の甚く甚しく御在し坐
 水ハ二氏共々相並びて治るる可き事を憤られりふ
 少壬申の役ハ功有り事ハ御紀ハ遺赤麻呂忌部有子
 人令我古京と有り荒尾田直赤麻呂と共々飛鳥の

舊都を戒水るあり續紀ハ大宝元年六月壬寅朔陰
 癸卯正五位上忌部宿祢色布知辛詔贈後四位上以壬
 申年功也と有り是あり然水ハ右別引其兄子人
 其二年三月戊寅從五位下忌部宿祢子有進從一階
 月庚子詔從四位下忌部宿祢子人從四位上と有り兄
 在る後水ハ功臣と云程ハ水ハありしと
 可一通證ハ式外近江國滋賀郡色布明神社在葛川谷
 坊村古來祢之地主神云と有水ハ色布主ハ近江朝廷
 在て心を通ハ仕奉る故ハ殊ハ舉給へるこ
 有又續紀ハ天平宝字二年十二月壬寅外從五位下
 忌部有里麻呂等若干人賜姓連忌部有融麻呂等若干
 人賜姓造と有り此二人共々此時に至る迄ハ猶舊の
 姓ありハ其天武天皇九年ハ連姓を賜ひ同十三年
 ハ宿祢姓を賜へる其子有色布兄弟より其

支流の忌部有ハ壬申の功臣と云ふハ非リハ此
 を以テ漏ラるを此時に至リテ黒麻呂ハ族若干人
 ハ連姓を賜ヒ融麻呂ハ族若干人ハ造姓を賜ヒ
 一其若干人の忌部ハ拾遺ニ神祇官神部可有中臣
 齋部猿ヤ鏡作玉作盾作神服倭文麻績等此而今唯有
 中臣齋部等二三氏略と云ハ神部ニ仕奉ル此人少
 け心事上ある中臣氏ハ例を以合世曉テ可キ者少
 一備姓氏録右京神別
上天神ニ齋部宿禰高皇產靈命子天
 太玉命之後也ト見えれば唯一家のみ如クハ
 ども然ラズ同氏同姓あるハ別ニ舉載スルハ例ハ

延喜六年日本
 紀竟宴歌得大
 玉命物部安興氏
 佐加多能阿麻呂
 流阿夫手何能
 留度曾西多母
 須惠ニル坂佐波
 志立氣留と有
 一此歌の如ク

一ハ右の連姓ふるハ造姓ふるハ已ク宿禰姓を賜フ
 一ハ右の收まらる者ハ所思えハ少シキ
 の見えざるハ他國ニ散在ガ故ナリ拾遺ニ平置帆負
 彦狹知神ノ事を云テ故其裔今在紀伊國名草郡赤木
 鹿香ニ郷採木齋部所居謂之赤木造殿齋部所居謂之
 鹿香ニ有ル其二神ハ太玉神ヲ牽給テ少神等ニ其
 二神ハ齋ハ天高命ヲ牽テ少神ハ各其中ニ
 其長トシテ太玉命ヲ神胤とスルハ必無テ叶ハズ事
 不可ナリ少シキ
 ○太玉命古事記ニハ布刀玉命ト作
 姓氏録又古語拾遺ニハ天太玉命ト所見ナリ名義ハ記傳八
 二太神宮式ニ著木綿賢木是名太玉串ト見え書紀ニ
 五百真坂樹八十五玉籤ト有リ今此神ハ玉鏡和幣ヲ著
 たる真賢木を取持給ベハ若ハ此太玉串ノ義ニハ

有む借玉串の名ハ手向串云々可し然レハ其串を省
きて太手向命と云フ可し者不布刀御幣登取持而レ
有レハ太手向と云心レ云レハ此レ就レ考レ
レ此第三ノ一書ヨリ於是天児屋命掘天香山之真坂木
而云云乃使忌部^首遠祖太玉命執取而廣厚祢禰祈啓
矣レ見え又古語拾遺ヨリ令太玉命捧持祢禰亦令天
児屋命相副祈禱と有レ右ノ二神ノ行事相分レハレ
天児屋命ハ祢禰ノ事を主シ天太玉命ハ其太御幣を
執捧レバレ給ふ神ノ御在レ坐レハ寔ニ太手向命ノ
義云々可し然レハ傳十二^{五十一}云云ガ如ク手

向ハ万葉一^{二十}ニ^下帝取向而早還來年と有レ取向^レ
切レ言ヨリ打任セテ道饗祭ノ事を云云云レハ
近キ語ヨリ有レハ取向ヨリ多麻と約シむ事ハ
余ノ^二近遠クヤ侍^レむ^レ記傳ノ右ノ如ク太玉命
此^レ以前ニ天児屋命を天招祖泥命云々
可レ説レハ^二合^レレ^レ者^レヲ^レ太玉串ノ事ハ
傳二十一卷五百箇野葛^ノ故又思ふニ天児屋命ハ天意
弥命ノ意云々由上^{二百十}ニ^下説^レル^レ如ク云レハ其ハ意
對^レレ^レ並^レビ^レ太靈命ノ義ヨリ非^レレ^レ其ハ万葉二^{十三}
下^ニ真木柱太心者有之香杵此吾心鎮金津毛云々心
下^ニ太^レ云^レビ^レ又和名抄ニ凝^ニ海藻^ノを俗用心太二字云古

ニ呂布止て有ふと共ニ同ト例ナレハ靈ミル太トハ
何トナリ云々可キ若テ此御名ハ心ハ八意ト云
ニ對テテ靈ニ太靈ト云々ナリナリ然々上ト引
ルカ加イ捨遺ニ太玉命所率神名云々ト有テ其所屬
ノ神等ノ多ク御在シ坐テ御事ハ更ナリ其天石靈段
ニ直令太玉神率諸部神造和幣ト見え御天降段ニ直
太玉命率諸部神供奉其職如天上儀ト云々有テ諸部
神を率テ供奉^{モリ}ス事ノ首ト御在シ坐テ神々レハ太靈
トハ實ニ祿^フ可^ク神名ニ多ク有ける新レハ此ト太
ハ垂仁天皇二十五年御紀云々大倭大神ノ御言ニ皇

御孫尊專治葦原中國之八十魂神ト云語ニ有テ八十
魂神ノ八十ニ同ト状ス可^ク上^{百七十}ト云々如
ク八意思兼神ト申すハ八百万千万神ノ意を兼テ唯一
神トテ統持セテ義ニ等^ク太玉命ト申すモ供奉^諸
部神ノ百八十ノ靈を以テ統持セテ義^ノト云々ハ云々
少^ク凡^テ神ノ功用御在シ坐テ事を御靈ト云事常ナリ
有テ思頼出現章第六一書ニ是以百姓至今成崇思頼ト
命^ノ玉ハ借字ト正^シト太靈^ノ義^ノ取^テ天見屋命
ノ心^ト此神^ノ靈^ト相對^シ又^ハ一義^ト太玉^ハ太富^ノ義^ト
可^ク侍^ル此警戸隱^ル御時^ニ日神^を遷^シ坐^テ奉
新宮供奉^シ給^ヘ御功^ニ因^テ御名^ヲ可^ク其

△播磨風工記讀
宍郡中川里條小字
時大中子以宮作屋
天皇和云此之為同
富と有る富と同
ト事ト一ト

ハ傳五十七日巳日註也神世七代章日次有神大戸
之道尊一云大大戸之遺尊一云大若邊尊亦曰大戸尊
道尊大若邊尊亦曰大富
富邊尊ト有る戸之ハ備字トテ殿多ク戸尊ト富トハ
共日堂を云ふり室基本記日心御柱を富物代ト云ハ
顯宗天皇御紀室壽御詞日取菅草葉者此家長御富之
餘也云ハ所見也之富是トテ△太玉命日玉ハ其轉多ク
可ク其孫日天富命日專御殿造日功日因水之各ト聞
えテ拾遺日神武天皇段日妖氣既晴無復風塵建都檀
原經營帝宅仍令天富命太玉命率手置帆負彦狹知二
神之孫以齋谷齋鈕始採山村構立正殿ト有テ萬日政

の始トテ帝宅ノ事ヲ云々あり此を以テ天富命ト申
日其由日依テ負給テ事知ル水ナリ況テ此殿トテ
トテハ日神を天石窟より出テ奉リ新殿ト移ル
奉リ大宮賣神を以テ御前日令侍め豊磐向戸命櫛磐
向戸命二神を以テ殿門を守衛トセテ再磐戸向テ隱
坐トテ儲を成セテ事此ト專要ト有テ事ト有テ
水ハ令テ置帆負彦狹知二神以テ天御量大ハ介伐大峽
小峽之材而造瑞殿古語美豆能美所良可兼作御笠及矛盾ト
有也此時天太玉命日諸部神を率テ供奉ル水ナリ中
日甚重ト事多ク見テ其下日殿奈門奈者

元太玉命供奉之儀齋部此之所職也。有て彼氏にて
 此を二無く大丘にて行事を為るを以て太玉命
 の此時の重任ハ新宮造の事。御在し坐す事知る此
 たり斯れハ太玉ハ太玉。其太ハ天孫降臨章第二
 一書ハ其造宮之制者柱則高太板則廣厚。有て高太
 廣厚ハ當り玉ハ當り。此時ハ供奉此ハ天照太神ハ
 新宮を申す。又神武天皇段ハ天高命ハ當り其帝
 宅ハ事。又天ハ右引。如天上儀ハ仕奉る此ハ行
 事。因水ハ名。合せて太玉命ハ名義を曉る
 可く。有ける。然此ハ太玉命ハ御名ハ太手向命ハ
 也。當り太玉命ハ其謂無也。

△後物多し今
 昔物語三卷ハ大
 納言公任の御女
 ハ二條殿北方ニ
 御在し坐けり雪
 降り且其御許
 小奉り降雪ハ春
 美と其六七積り
 けり何れ高く
 城勝らむと有
 ハ屋と共小雪の
 高く積るを云
 かり

ハ非ず又太玉命ハ義ハ見て造殿ハ御功ハ因水ハ神
 名ハ心得む。亦違へる。非ず。如し。雖も物ハ
 三ハ。合ふ。云事ハ有る。非ハ。此中何ハ
 一ハ。是。余。二ハ。非。可。今思定難ハ
 後人ハ取所。皆此太玉命ハ出自を姓氏録ハ齋
 部宿禰高皇產靈命子天太玉命之後也。見え三代實
 録ハ貞觀十一年十月廿九日神祇大祐正六位上忌部
 宿禰高善改忌部為齋部其先出自高御魂命也。有り
 又古語拾遺ハ其高皇產靈神所生之女名曰栲幡千千
 姫命。天祖天津彦。其男名曰天忍日命。大伴宿
 天太玉命。齋部宿。有り天忍日命ハ御兄弟ハ坐神
 少然。姓氏録を見。大伴宿禰高皇產靈命五世

孫天押日命之後也略と見え大伴大田宿禰高魂命五
世孫天押日命之後也と有り家内連高魂命五世孫天
忍日命之後也と見え天忍日命高皇產靈尊五世
孫より又佐伯宿禰大伴宿禰目祖と有り然るに佐伯
連天雷命孫天押入命之後也と見え元たる此に依て天
忍日命天押入命と申す亦名御在り坐す事も知る
此又其祖父天雷神坐す事も知るなり又久未
直高御魂命八世孫味耳命之後也と有り味耳命ハ神
武天皇御紀と謂ゆ大久未命亦名道臣命の事にして天忍日命の
孫より此を以て大伴宿禰久未直の同族なる事灼然

きを又淳元連移受年受此命五世孫弟意孫連之後也
と見え元たる續後紀景和元年五月の下の淳元直略中
大久未命之後也と有り又門部連年頃此命児年頃
此命之後也と有るに此攷考合じ其守年頃此命を古史第百三十七
段後天忍日命の御父なる由に定めて此に實示
然る言より天雷神其子年頃此命其子天忍日命と
云ふ續々なるなり斯るに大系圖に載る藤原系圖に
天兒屋命本系帳云興登魂尊聖玉主命之に許登能麻
邊媛命所生と有り玉主命下四百八十一註せり神名式に土佐國吾川郡
天石門別安國玉主天神社見えたる為名に状を思ふ

子決く守年類此命と同神ふ少備其守國玉主天神と
申す御名ハ天石門別り御功を成坐り國土人民の安
在る可事神議せ御在り坐り御靈威を幸給へ
る義ふれハ天思日命天太玉命の御父として甚允當
なる事あり
但此ハ太玉命の出自を云むとして如
此く説ゆて行く時ハ大伴氏の系記
の穿鑿は落る事多れハ如此く少く云て其意しき由
ハ天孫降臨章第四一書ある天思日命の傳云むを
合せ讀て曉る可し天雷神の事ハ已
ハ傳十一卷二十一下は説註せり日
○古事記云召天
児屋命布刀玉命而内振天香山之真男鹿之肩板而取
天香山之天波之迦而令占合祿迦那波而云云此ハ上
百七
十下
下已云云が如く思兼神の深く遠く思慮り給

へりし謀の任は種々設備入物為り今捧持て奉る
むと為る期は臨きて其謀の如く為り大御心の合ハ
せ給ふ可や否や日神は下向奉る為り御下を以て
定むる御事有り多りけり其天香山の事ハ次云ハ
一真男鹿ハ此第一一書ハ全剃真名鹿之皮以作天羽
翰と見え龜卜祭文にも任天香山白真名鹿とぞ所見
たり記傳八三十一下ハ真ハ称辞なり書紀顯宗天皇御卷
ハ牡鹿此云左鳴子如く有りて見えたり 真ハ又
佐々云むが如く播磨風土記ハ香山里本名鹿來墓所
以号鹿來墓者伊和大神占國之時鹿來立於山岑是忽

似墓後云々改名為香山と有り伊和大神の國を占ひ
給ふ時は當りて鹿の來立ぬる因を以て香山と云地
名の起りしと聞えたる以上古の鹿十の事を專ら為
つる故ふり備此鹿を御下は被用する事ハ朝野群載
に載る中臣祭文に板清給事乃板戸乃八百萬乃御神
達ハ佐于鹿乃八御耳乃振立天聞食止申と有る如く
耳聴く物を聞入れ感くる智有を以る可く然れば
志加と云ハ知感の義あり可く唯は加と云ハ感
の意はこころ有りゆい此祭式部日記に陰陽師共
八百万神ハ耳振立ぬる事ト云々平泉物語に嘉應元
年の頃比叡山の僧共が表白の辭として記せしは七社

の御神等佐于鹿の耳振立て聞給へ云々と有る右
の中臣祭文は本著にあり者多し由己は板詞講義
に註せし有り記傳は和名抄に肩加太鬲骨加太乃保
祿と有り肩を抜とハ其骨を採取を云ふなりと有り如
し本草和名に鹿骨和名字之加乃保祿と有り是より
可し和歌童蒙抄に引る古語拾遺は天香來山の鹿を
生ふらふ捕へて其肩を抜て鹿をば放遣りて云々と
有り如く活せて置て骨を採取するなりしハ内技ハ記
傳に内ハ備字して書紀に全剥此云宇都播伎と有り
全々同ト俗に圖と云意なり全ハ骨を抜き全ハ皮
を剥ハ中ハ空虚に成る意にて宇都とハ云より下

公奥義板に載る
香山の鹿は香山の法
下は古解は肩板
鹿骨の骨は又一
年と云は肩の骨と有
ハ此故事は由は云

小内剥鵝皮剥レ也レ有レ所見レ少レ肩背レ云レ唯肩レ云レ例レ万
葉十四卷武藏國歌レ武藏野亦字良敵可多也伎麻左
氏尔毛乃良奴伎美我名宇良尔低尔家里レ有レ武藏
野レ虎レ看骨レ取レ燒レ占レ故レ如此云レ又未動
因相聞往來歌レ於布レ之毛等許乃母登夜麻乃麻之波
尔毛能良奴伊毛我名可多尔伊氏年可母レ有レ可多
ハ上レ看骨レ別レ北レ出表レ云レ云レ云レ可
十五卷六精作挽歌レ由吉能忘未能保都手乃字良
敵宇可多夜伎互レ有レ北レ燒レ云レ上レ同レトレトレ
波レ迦レ龜レ下レ祭文レ天母鹿木レ有レ記傳レ和名
抄レ朱櫻波レ加レ一云尔波佐久良又木具部レ梓木皮
若可以為レ炬者也和名加波又云加仁波今櫻皮有之
見元万葉六十八レ櫻皮纏作流舟レ詠レ古今集物
名レ迦尔藻櫻レ有レ源氏物語レ云レ迦尔藻櫻レ云レ

是亦少是等を合せて思ふレ此木レ本名レ波レ迦レ子
下レ迦尔藻ハ皮名レ多レ倚皮を専用レ云レ云レ云レ迦尔藻櫻
ハ木名レ成レ水レ多レ斯レ水レ和名抄レ迦尔波佐久良
ハ有レ今本加字レ脱レ事著レ古今集迦尔藻櫻レ
註レ朱櫻レ作レ頭昭レ云レ能合レ云レ云レ云レ云レ波
ハ迦レ母鹿レ義レ多レ云レ云レ此木理ハ縦レ通レ皮紋
ハ横レ通レ其性尋常レ木レ異レ者レ云レ云レ云レ云レ
ハ縦横レ行徹レ不義レ取レ被用レ云レ云レ云レ云レ又思
傳十一卷七十一下レ説レ云レ加レ四神出生章第八一
書レ正勝山レ神有レ其レ古事記レ正鹿山レ津見神
ハ有レ山レ神レ鹿レ由レ有レ証レ多レ又レ宝鏡出レ現章第
一レ一書レ箱田レ之宮レ主レ簀レ狭レ之八箇耳レ箱田レ安レ其レ

脚摩乳手摩乳神を稲田宮三神として素戔鳴尊ノ授
賜ハス名ヲシテ然ル古事記ハハ僕者回神大山津見
神之子焉ト見えタスコト古事記ハハ八箇ノ神ト云フ名ヲ由リ有
ガノ聞クえタスコト天孫降臨章ハ大山祇神ノ神ト云フ鹿ノ葦
津姫ノ神名有リ上ニ鹿ト有リ又御鎮座傳記ハ櫻大
刀自神靈花木座ハ大八洲櫻樹始自天上降居也因以
為花南ノ姬命ト也ト有リ又ハ母ト又記傳ハ此朱櫻を取リ皮を
鹿ト云フ由リ有リ又ハ又記傳ハ此朱櫻を取リ皮を
燃シテ彼鹿ノ肩骨を灼ク科トシテ後世ニ此を祓用
スト見えタ臨時奈式ハ元年中御ト科波葦加木皮者
仰大和国有封社今探進之ト有リ齋宮式ハ也汝ハ可
五枚ト見ユ奥義抄ハ公家ノ龜卜ノ御占ト云事有リ
下部氏朱櫻木トて龜甲を灼テ占ムふコト有リ又ハ笛
吹社ヨリ朱櫻ハ木を伐テ都ニ奉リ為レレハ神目龜ノ

トス事ハ不ズ侍ケルコト申ス事ハ有リ補ト云
水ト其有封社トハ式内ノ官社ノ事ト何レハ一
所ヲ指シルコト非ズ也ト宮立秘事口傳抄ハ御ト始儀條
官掌進致ニ賀木此木官掌自笛吹社請取也ト見え
ハ水ハ中頃ヨリ其社ノ木ヲ探進ス事ハ成ル也
其事ハ就テ考ヘ有リ傳ハ二十二ノ語ト云フ即チ添テ部ノ先次神社ト有リ是
スコト可ク其社ノ神名式ハ大和国思海郡葛木坐火
雷命神社二座並名神大月次相嘗新嘗有大和志ニ在笛吹村笛
吹明神傍ト云フ火雷神ト笛吹社ト二座並神在シ
坐シケル地名ヲ吹苗村笛吹山ト云フ計ハ事ハ有リハ
火雷神ノ方ハ終ニ其末社ト如ク成ル事ハ有リ也

此其御子宇麻志
摩治命と申すも
右の所又依りて
水由有と云ふ

此朱櫻を此社地に採る事甚其謂有る者少し龜卜祭
文に採天香山之布毛里木造火燧燧出天香火吹着天
母鹿木と有か如く斬過突智神の天香火を受賜ハル
其御靈威を仰奉る事之所聞カハ實ニ此社に朱櫻
を令採らる本縁有る事ハ有ハル此社の事傳十
二十九と云ハル天孫本紀に饒速日命六世孫建多宇利
二二下と云ハル命笛吹連若大養連之祖と見え此録
河内國神別天孫の笛吹連火明命之後也と有ハル笛
吹社の饒速日命を祀ルル事ハ或説ニ神名式の
添上郡元次神社を一本に吹神社と作ル文明十一
年古寫本東大寺戒壇院神名帳に笛吹大明神と有
依テ其社の事と定メ云ハル此
ハ正ニ、笛吹ノ誤ト見え其ハ難カ
占合ハ下合合の義
有る由記傳に云ハル如ク儲此に占ハ此に思兼

神深謀遠慮議曰云云有ハ此下何神を以テ
此物を作リしハ何神を令セテ其事を令成テ也
思慮之所是あり令合ハ其作り供奉る物實ニ日神の
御心と合ハル此招奉る事ハ諸神の成一行ハ
事を以テ感給ふハ否と合セ試ス為ニ兆を以定む
を云ふ其一二例を云ハル傳七十四に云古事記
に於是二柱神議云今吾所生之子不良猶宜白天神之
御所即共參上^{諸天神之命}尔天神之命以布斗麻迹尔卜相而詔之
因女先言而不良亦還降改言と見え此二柱神議云
今吾所生之子不良ハ先ト告其妹曰女人先言不良

有を合せたる者ありて女人の言先立し故に今生る子
の良いざるあり改言の良しきむと御心は決り定入るるに此は思兼
神深謀遠慮議曰云云日事謀に當りたるあり然れども
實に然るに否やと如何に定めさせ給はむ此を以
て天神に御命を請給へるるあり然れども二柱神の顯
身より天神の隱身より直に神言語し給はばるか故
に太占を物為り其日出る所を以て天神の命以て告
諭し給ふ御心と受賜はるる事より此は思兼神の思
慮に諸神等共云々の謀を成し奉ると雖も的當に
為る日神の天石窟の中は刺隱り御在し坐せられん右

よ云る顯身と隱身と如何に思有て直に御命を請奉
る事を得ばれん太占を設けりて曰下次は天神之
命以布斗麻延尔下相而詔也因女先言而不良亦還降
改言と有る二柱神の御心より天神の御命と相て
兆は出る所も其議とせ給へるか如何にを以て天神
の御命と受行らせ給へるか古語拾遺の此段は思
兼神の思慮はるか如何に成し竟て儲備既畢具如所謀
と有る其謀の所は合るを占合たり云るよて占も此
方と設るるの合は彼方より來りて行合ぬ云ふ者より和歌
童蒙抄に彼太神の出生む事と占ふる御と謀と合ひ

て警戸を押開し出坐し有を思合せて曉る可し
猶風神祭詞より百能物知人等乃下事尔出羊神乃御
心者此神止白止負賜支と有る物知人ハ此の思兼神
の如く深謀遠慮有る人云ふ下事尔出羊とハ心
の占又出むより神乃御心者此神止白止負賜支と云
ハ此年頃五穀物を始て天下の公民の作物を成す損
傷する神を思慮申せども次ハ此子物知人等乃下
事字以此下止母出留神乃御心母無止白止負賜支と
有り上件云々物知人等ハ其神ハ此神ハ然りと思
ふハ神等の御名を擧て下向ふは出る神ハ神心ハ
無ハ此申せるハ素より此事を風神より思知る
よりけりハ占より合ぶる筈ハ事あり此ハ於て人事
の及ぶ所既ハ盡るハ故ハ皇孫孫命詔久神等字汝
天社同社止忘事無久遺事無久祿辞竟奉止思志行汝
須予誑神曾天下乃公民乃作物字不成傷神等汝我
御心曾止悟奉礼止字氣此賜支と有が如く下事あり
ハ測知り奉り難ハ程ハ事ハ至りてハ其極ハ神誓
の事ハ及ばせ給てりより此を以て占より此方の性
情多事を物ハ託て合止知るを云ふ多事知心者

多し令麻迦那波而記傳ハ雄略天皇御紀ハ於是大
泊瀬天皇^{ヒキ}寧^{サレ}可欽明天皇十五年御紀ハ寧^{ヒキ}可占擬射落
新羅騎卒甬壯者崇峻天皇御紀ハ伏河側擬射と見え
新撰字鏡ハ擬設也度也万加奈布^トハ有り字書ハ擬揣
度以待也と注せし今ハ其意あり今世ハ俗ハ万事を
惣ハ行ハ執行ふふをも又用脚を給^{ツク}るハ麻迦那布と云
ハ意ハ轉れる多しと云れハ源氏^ハ柏木卷^ハ御現と云
取麻迦那此也と有ハ硯を取設くるを云ふなり若義抄
良布とハ麻祿伎流とハ所多流とハ於布とハ登流
とハ佐志とハ志豆加とハ此登志とハ割豆久とハ
那良夫とハ所此とハ所此汝加流とハ麻宇氣氏
とハ有り麻加那布と無ハ設と進テ故多可ハ儲太

△神武天皇戊午年
御紀ハ奈何鳥若
此惡鳴耶乃繼
弓射之
△權ハ人ハ御
硯取擬して聞ハ
ハ若若下地ハ
御硯引寄て給ハ
て手づりハ押摺り
爲取擬して書
奉り給へど
△擬して夕霧三
ハ左右ハチフ
擬ハ直ハ給へど
手習^三ハ小擬ハ
ハ是心者無
宇多白見知ぬ
△ハ衣衣甲
萬取擬ハハ
と有ハ取行ハ
云
△易林本ハ即
賄賂ハ麻迦那
と有り

占ハ八洲起元章第二一書ヲ出ルニハ杖二柱御祖神
ノハ唯御心ヲ御占ニシテ如此物を設備して卜向
ハ已給ニシテハ味ハシむを鹿ノ御卜ニ此時ニ起
ルニ故ニ如此ク其備ハ較略を委曲ニ云述ル者
ありしハ一釋ニ右ハ太占ハ下ニ引テ私記曰向は何
占哉答是卜之謂也上古之時未用龜甲ト以鹿肩骨而
用也謂之布斗麻迹ト有リ此ハ二柱御祖神ノ下ニ係
テ云ルハ誤ニシテ實ニ鹿トノ起ハ此磐戸隱ノ時ニ
事古事記又和歌童蒙抄ニ引テ異本古語拾遺ニ見
見えて混ハ所無ニ者多クを如上百七十ト云ル

中古迄ハ東國ノハ傳ハル趣多ク然レテハ神代
ノ餘風ノ遺ル者少ク後漢書倭傳ニ灼骨以下用決
俗舉事行來有所云為輒灼骨而卜以占吉凶先告所卜
其辞如令龜法視火垢占北ニ有ク如ク外國ハも南
少テ天下一般ハ風多ク一ノ思ふ可ク始奉 龜トハ亦神
代ニ起ル者ト所見たり其ハ釋ニ龜北傳ノ文を引
テ因ニ先師說云此時卜者鹿ト也龜ト者皇孫天降之
時太詔戸命進述龜誓之後出來者也異朝亦始者鹿ト
之由有所見者ト云ルハ天孫降臨ノ後ニ出來ルハ心
事龜北傳ニ云ル如ク多クハ不可ハ崇神天皇七年
御紀ニ命神龜以極致災之所由也ト有ハ唯文章ノ謬

ハ又万葉十九年ニ于
聖武神宗毛更負
ト部鹿毛更負
ト部鹿毛更負
ト部鹿毛更負
ト部鹿毛更負
ト部鹿毛更負
ト部鹿毛更負
ト部鹿毛更負
ト部鹿毛更負
ト部鹿毛更負

のことも云ハ云べしめし職員令神祇官義解
トト灼亀也北者灼亀衆横之文也凡灼亀ト吉山者是
下部之執業ト見之神祇令義解ト凡ト者必先墨書龜
然後灼之北順食墨是為下食ト有云トハ記記トハ
以前ト出来ル書ト云ト亀トを云ト鹿トを云トハ
三代實録貞觀十四年ト下ト是雄壹岐島人本姓ト部
改為伊岐始祖思見足彦命始自神代供亀ト事厥後子
孫傳習祖業備於ト部是雄敦ト之道ト究其要日者之
中可謂獨歩ト有て亀トト供奉ト事ト始自神代ト有
ト其始を何ルル神トト為む天兒屋命トト継ト祖業

を傳習ト今ト至ル趣トハ強ト文饒トト之ト
云ト難トを思トト寔トト右ト引ト古事記ト部トト如
トハ天上トト御事トト因土トト常トト行トト較
略トト甚トト異トト多トト依トト其事を委曲トト殊更トト舉書
トト北トト多トト有トト多トト記傳トト上代トトトハ凡トト右
トト如トト鹿トト肩背を用トトハ亀トトを用トト多トト漢ト
トト學トト後トト事トトト云トトハ凡トトト予トト心トトハ漢
トト却トトト皇國トト亀トトを神代トト已トト學トト取トト不
トト可トト所思トトえトト然トトト亀トトを加トトト云トトト神トト語
トト轉トトトト又感トト義を包トトト鹿トトハ知感トトト其

義等しき此下事は就て靈しく奇しく感通く不由
小依り上古の神等と號けさせ給へる事知る此又其
龜下を為すに虎トとの異なる事無く神の御心も何れ
御下は顯はれ出るるが然すがは神の成し始給へる
者ありけりと思ふは皇國の國守りの物あり
らざる然る正定ある信驗に見わらるる有り
けり其季しき所由は天孫降臨章第二一書太占の下
に説てむ傳三十二卷 十百 見る可きなり 書大禹謨
龜と云ひ周禮大卜註に命龜若龜以所卜之事也と云
て彼もては甚古き師の云ひたるが如く我大國主
神の取戎又出興し給へる時は然る物共をもち持渡
るに御在し坐けむが彼に傳はれるるて我が虎下の

の背を甲は換るるに之有りけり凡ての事は異り無
く又西蕃も龜下の北文に皇國あり然し異り
るざるを合せ見て彼に此も其本ハ一なり有りける事
を曉る可きなり因云李時珍説は龜鹿皆靈而有壽龜
首常藏向腹能通任脈故取其甲以養陰也鹿茸常及
向尾能通督脈故取其角以養陽也乃物理之玄微神工
之能事と云るは此二物 ○天香山の記傳八十三日
代官段倭建命の御歌に比佐迦多能阿所能迦具夜麻
と有り此は依り訓に前 迦具土 出たる香山ハ大
和國なるを此 ○ 天上あるを云は別あり備伊邪
那美命の神遊坐る所は金山昆古神金山昆賣神波迹
夜須昆古神波迹夜須昆賣神有り次は彼大和國の香
山の事見ゆ然るに彼香山は填安て小地名有り此は

天金山の名有り彼此を合して思ふ日本此山の名ハ
彼迦具上袖より由有りと云水たると如く實ハ斬遇突
智神より由有り傳十二十一二十
四神出生章第七一書ハ伊弉諾尊拔劔斬斬遇突智為
三段と有る其御骸ハ天より上りて山と成れる故
其神の名負て天香山と云る者ありけり故曰神ハ
磐戸隠れ此時ハ當りて其招奉らるる料ハ廢物を天
香山より取ら悉くハ其謂れハ因りて者ハハ八意思氣
神ハ深謀遠慮ハ此ハ至りて日神ハ感ハ御在り坐る
を以て少縁ハ所由ハ非る事を曉り明らむ可き者

纂疏ハ天香山者按風土記謂天上有山分而墮地
一片為伊豫國之天山一片為大和國香山今謂在
天之時也と見えり如抑此時ハ物を天香山より採
りて事ハ此次ハ以天香山之真坂樹為鬘云ハ第一
一書ハ採天香山之金以作日矛と有る古事記より取
天香山之鐵而求鍛入天津麻羅而料伊弉諾許理度賣命
令作鏡と見え古語拾遺ハ令石凝姥神取天香山銅以
鑄日像之鏡と書せりハ鐵を採らる同トハ天香山
の事ありけり其物ハ因て天金山と云るありけり
又古事記ハ内拔天香山之真男鹿之肩拔而取天香山
之天波之迦而令占合麻迦那波而天香山之五百津真

賢木矣根許士尔許士而略^中天字受賣命于次繫天香山
之天之日影而為鬢天之真柝而于草結天香山之小竹
葉而略^下見えたり然れは此第二一書^下使山雷者採
五百箇真板樹八十玉籤野樵者採五百箇野薦八十玉
籤と有るは其出所を云ふは右の文共の合せ
見れば共々天香山の事知れ又其山雷神ハ斬過
突智神ハ御骸^下成坐る大山祇神^下坐せは其天香
山^下主と御在^下坐るを思合^下可き者あり又古語
拾遺^下令長白羽神種麻以為青和幣令^下天日鷲神造木
綿津咋見神穀木種殖之以作^中白和幣と有る下以上

二物一夜蕃茂也と有る皇太神宮祢豆譜圖帳^下此の
太幣帛の事を下枝^下天乃香豆比^下如^下作留^下真蕪乃木
綿着豆と有る天香山^下依て香豆比^下云事あるを
思へば麻穀の二物共々其山^下成れり^下者ある事知
り此又拾遺^下令天棚機姫神織神衣と有る機殿儀式
帳^下天八千十姫殖桑葉於天香山以新蠶之御糸織供
進御衣於太神と有るは同く天香山^下物為り^下子
又拾遺^下令^下手置帆負彦狹知二神以天御量伐大峽
小峽之材而造瑞殿と有る大峽小峽ハ何れハ山と
ハ為む上より例を以て天香山^下山峽ある事あり

著明よりけり 其餘も此章の諸物の出所を云ふ
心き者よりけり 但或者の説は天磐戸在天香山と云
ふに何の據て云ふに余りの氣跡を推察より歎
ふ可く 故右の如く思氣神の源謀遠慮は因て上件
云ふに如く此時は日神を招禱奉る科の物共を彼軒
邊突智神の御骸に成れる天香山に採り又此場は侍
ひて共に祈奉給ふ主として神等ハ皆悉く其神の
御裔に坐るまじは甚く深く遠く故に奇しき致有る
御事と云む伺奉るにけり然るに上 百三十一日巳下
註せるに如く天日の其始彼可美葦身彦舅尊の御功
に成て固より天中にて伝て世の限を照り御國より

を後天照太神の此國土にて御生坐つるに奇異は
光華明彩しく御在し坐て即天地の内を照徹せ給
へるが故に天柱を以て送舉奉るに給ひてより高天
原を統御し看す皇太神に定り給へる此は依て愈照
明りて云む有けるを其後二柱御祖神の真名弟子
は火産靈神を生奉るに給ひけるに故有る御父大神
は斬る水の世給ひけるに其血天に上りて天河原に
る五百箇磐石と成り其骸も天に上りて天香山と成
りしにけり今眼前に御を見奉るに如く天日の御
光を備へるに御在し坐りけるに然るに今此日

天照太神の天石室に入らせ給へりむるも固有
の先有り照す可く又火神の先を依り明るくあり有
心よりけりを此の日神の磐戸隠れ給へり故に
常夜往ける事、右の神等の徳も何も天照太神一柱
に歸奉らるが故より故思兼神の神議以て日神の招
禱奉るむ謀り其大神を屬奉らせ給へり火神の化
れり天香山の物を以て定め又火神の御族の神等を
以て事の令行給へりるむ有ける然水ハ然る物共
を天香山ニ採る
事ハ天照坐日太神の御為り少りては縁有る事を求
め出且此大神の隠坐るが為り荒振る邪神共の蔓
こり荒びたり其勢を挫きて少りも若て此山ハも
速く日神の御徳を在せ奉らむとあり

天照太神の天石室に入らせ給へりむるも固有
の先有り照す可く又火神の先を依り明るくあり有
心よりけりを此の日神の磐戸隠れ給へり故に
常夜往ける事、右の神等の徳も何も天照太神一柱
に歸奉らるが故より故思兼神の神議以て日神の招
禱奉るむ謀り其大神を屬奉らせ給へり火神の化
れり天香山の物を以て定め又火神の御族の神等を
以て事の令行給へりるむ有ける然水ハ然る物共
を天香山ニ採る
事ハ天照坐日太神の御為り少りては縁有る事を求
め出且此大神の隠坐るが為り荒振る邪神共の蔓
こり荒びたり其勢を挫きて少りも若て此山ハも
速く日神の御徳を在せ奉らむとあり

伊豫郡自
此日落降しりあり有ける伊豫風土記に伊豫郡自
郡家以東北在天山所名天山者倭有天加具山自天天
降時二分而以片端者天降於倭国以片端者天降於此
土因謂天山也と見え仙覺の萬葉注に阿波国風土記
の如く、空より零降りたる山の大方あり、阿波国に
零降りたるを天祝詞山と云ひ其山の碎けて大和に
零着たるを天香山と云へり有る是より此所由
に依り見え、万葉三十一日天降付天之芳來山又或
本歌云天降就神乃香山と詠るる其古傳の遺り水々
者あり又一、七崗本宮御宇天皇大御歌に山常庭村山

伊豫郡自
此日落降しりあり有ける伊豫風土記に伊豫郡自
郡家以東北在天山所名天山者倭有天加具山自天天
降時二分而以片端者天降於倭国以片端者天降於此
土因謂天山也と見え仙覺の萬葉注に阿波国風土記
の如く、空より零降りたる山の大方あり、阿波国に
零降りたるを天祝詞山と云ひ其山の碎けて大和に
零着たるを天香山と云へり有る是より此所由
に依り見え、万葉三十一日天降付天之芳來山又或
本歌云天降就神乃香山と詠るる其古傳の遺り水々
者あり又一、七崗本宮御宇天皇大御歌に山常庭村山

有等取與呂布天乃香具山と詠也此給ひて此山と
畝火耳梨を合せて三山と云て甚止事無事物と爲
也給へる事ハ妙不奇ハ所謂有る事ハ亦む有は
播磨風土記又出雲國所著大神傳大和國畝火香山耳
梨三山相聞此畝諫止上來之云云と有を取也給ひて
万葉一卷中大兄尊三山即歌曰高山波雲振火雄男志
等耳梨與相諫競伎云云と詠也給へる事今思ふは此三
山共ニ元ハ天香山の片方よりハ亦ハ亦ハ古事記
ハ香山之畝尾と云語有り又耳梨ハ東端と云ハ近
く南成さる水ハ多し楮又後紀曰延暦二十四年十二
月丁巳勅大和國畝火香山百姓任意伐損國吏
寛容不加禁斷自今以後莫令更然と神武天皇御紀
有ハ如く甚止事無事故有る事多し
賊虜所據皆是要害之地故道路絕塞無處可通天皇思
之是夜自祈而寢夢有天神訓之曰宜取天香山社中土

香山此云以造天年宛八十枚平宛此云并造巖宛而敬
今過夜寮巖宛此云亦為巖宛詛如此則虜自平伏巖
祭天神地祇怡途背詛此云怡途能加祥離天皇祇兼夢訓依以將行と有ハ賊虜ハ勢
強くハ富少難く時よりけるが故曰天神ハ命以て
天香山ハ土を取て天年宛又巖宛を造りて天神地祇
を敬祭る也御在ハ坐さハ虜自ハ平伏る也と訓奉る
也給へる事即此天石窟ハ時ハ故事を擬行し奉
水者多し若て此とハ別多れども崇神天皇十年御
紀曰武埴守彥ハ謀及むと為ハ所ハ吾聞武埴守彥之
妻吾田媛密來之取倭香山土暴領中頭祈曰是倭國之

物質則及之物實此云望能志呂是以知有事焉非早圖必後之也
 有之事其狀を採ふ其天降就天香山ハハ皇御孫
 尊の大宮柱太敷坐む大倭國の鎮めとして天神の神
 降し給へて御山ハハ有けり其土を以て倭國の
 物質と云兒詛り取ふむより自然又大御稜威の衰へ
 御在し坐む事を謀れらるる然らば此山の天降
 着て其域内に在るむ少縁の故由とハ所見ぶ少し
 師の古史ハ天神の天御量以て天香山を天降し給
 へる趣ハ文を成しとらハ物ハ見當らぬとも然も
 有ぬ可事事と云
物質と云ハ瑞珠盟約章ハ見えて
 物根ハ事と云ハ即物と成て

公所見ハを傳二十一
 以ハ引る舊事紀ハ全
 山雷者極天香山之五
 百箇真賢木云と

其種子を云ふ右ハ武埴守が謀れらるる天香山ハ土
 を種子として終日國上の金を得むとハの咒術あり
 此の情あり
 是か可畏 ○五百箇真賢木第二一書ハ使山雷者採
 五百箇真賢木樹八十玉籤と有ハ如ハ山雷神の採給へ
 るホもを此ハ其樹ハ事を主と云故ハ其採れハ神
 名を顯ハさるるため古事記ハハ五百津真賢木古
 語拾遺ハハ五百箇真賢木と作ハたり記傳ハ三十一
 五百津ハ枝の繁きを云て一木ハ上の事より書紀仲
 哀天皇御卷ハ五百枝賢木と有して曉々可ハ天若日
 子段ハ湯津楓朝倉宮段ハ百枝槻書紀ハ百枝杜樹ハ
 とい有る類あり此五百津を五百株と云ハ非あり布

△傳四一
百十湯澤
杜木の下云云

乃玉命の取持と有るは叶ハズ取と云ハズ借此を皇
太神宮儀式帳山向物忌職掌條ハ天八重佐加岐と
云るを以てハ一株ハ一ノ枝ノ八重ノ繁れを義と
ハ更なり口訣ハ五百箇真坂樹者繁列之言と有ル
共ニ同ノ義なる者ナリ 右ノ五百株ハ纂疏ノ神託ニ
有る非ト為レれハ多クハ四神出生章第六ノ一書ニ
五百箇真坂樹ハ十五箇ニ異ル者ナリ右ノ引
して其株云ふハ非ハ十五箇ト云フ是ハ其多
を云フ以て繁ル可ナリ又玉ノ鏡ハ各一ノ其有
を五百株ノ枝樹ナリ如何ハ愚書ヲ可ナリ何ナリ是
建正ノ証ニテ有ル

○真坂樹ハ古事記又拾遺ニハ共ニ真賢
木ト作テ御紀ニハ景行天皇仲哀天皇ノ御巻々ニハ

賢木ト作ルハ是真ハ例ノ禿語ニして坂樹又賢木
ハ借字ナリ者ナリ万葉三ニハ奥山乃賢木之枝ハ
白香付木縣取付而四十八ノ神樹ハ毛子者觸云子古
今集大歌所御歌ハ霜八度置け枯せハ賢木葉ハ五
葉田可ナリ神ノ木根ハ此ト有る拾遺集神祇ハ足曳ハ
山ノ真賢木常葉多ク葉ニ葉ノク神ノ木根ハ此ト見
えハハ同ノ貫之主ノ詠ハハ多ク故ハ意ハ易ク
ハハ可ク記傳ハ仙覺ハ万葉解ハ葉エタル樹ト云
ふハ云フ新撰字鏡ハ杜毛利又佐加木又龍眼佐
加木又榊柅旋三字佐加木ト有ル榊字ハ日本後紀十

公卿の榮樹を著
 神樂神歌の如加
 幾乃美年多乃也美乃
 左加美波の如美乃美
 手乃仁之分利阿比仁
 利之利之利阿比仁
 利之有之是乃

六より所見たり和名抄にも漢語抄龍眼木今按龍眼
 其子名也と有り此の後世の佐加紀に當り可なり
 と思来無し況て上代より叶ハズ撮と有り名義抄
 眼木を佐加紀と訓れ其下は神賢木坂木並未詳と
 見えたりハ當り此の木は無り可なり此を以て賢木
 仙覺の説の如く又冠禱考真榮は真坂樹と云ふ真榮
 多るを葉を可し又冠禱考真榮は真坂樹と云ふ真榮
 樹の義あり古神事にも公事にも言舉するもの常日
 常磐の堅磐よるを讀稱ふる物多し其時ハ木を以て
 を以て常葉なるを以て為り其を讀稱して真榮木
 と云ひ真榮葛と云ふなり且神社に依り松杉檀ふを
 を賢木と云て一種ふるさ其の中は紋鏡幣を懸け

公卿の榮樹を著
 神樂神歌の如加
 幾乃美年多乃也美乃
 左加美波の如美乃美
 手乃仁之分利阿比仁
 利之利之利阿比仁
 利之有之是乃

警華の柿を為し檀を撮有し撮と云水は其
 警華より景行天皇十七年御紀大御歌志羅伽之餓
 延嶋于受珥左勢許能固と云ふ撮有水は鏡幣を懸
 け賢木を正しく檀ありと云ふ撮ハ未見當り皇
 大神宮祢豆譜圖帳に皇太神乃天磐門前給天 隱坐時
 高天原皆聞天八百萬神等慈祈于時天兒屋根命夢
 悟天你久天香山天立流祢津加之木枝天曳折天一夜
 刺生此木三種神宝取掛天有之是乃可なり
 祢津加之瑞檀と云ふ同ト有り中臣壽
 詞に茂世天八桑枝乃立榮奉仕留り見えたり茂世を

大殿祭詞ニ五十檀御世ト有テ是正字ニ一々五十ハ
右ニ註ス五百箇ニ同ク枝葉ノ繁列シケテを云テ次々
八束枝ノ弥束枝ニ並ぶ所ナリ如此ク檀ト桑ト譬ニ
一々大御世ノ茂ク御榮元坐ノ事ヲ讀祢ハ申セヨ
水ハ檀ノ紫樹ノ義ハ充滿ナ有テ少ク神武天皇御紀大
御歌ニ伊智佐今幾未逆於明鷄白鳩ト有テ叢紫樹實
之多初久遠ニ賢木ノ實ノ多キを以テ御饗ノ物ノ夥オホクニ
ト譬入セ給ヘテ是を以テ此佐久幾ニ
檀多事持知クヨリ且傳十二百九十五丁ニ已ニ云フ
如ク四神出生章第六一書伊弉諾尊ノ大御身滌爲

ト給ヘテ檀原ト云ハ檀原あるニ大禍事を轉シテ
此上無テ大善事を得セ給ヘテ坐ヘテ愛レテ例有
テホウシ有レバ此ニテも瑞檀木を眞賢木トシテ
用ヒセ給ヘテ坐ヘテ然ル有テ可ク御事ニコト
神武天皇ハ畝傍山ノ東南檀原ノ地ニ初國所知看テ
大宮柱太敷給ヒ天照太神を磯城叢檀之本ニ初テ鎮
奉ルセ給ヘテ偶然ニ亦ガ皆神世ノ故事ニ
本着セ給ヘテ坐ヘテ少縁ノ所縁ニ亦ガ有
ヒテ然ルハ賢木ト云ハ神ノ奉ル常葉なる木を云ニ
テ一種ノ樹ノ味ニ中ニも珠ノ主ト被用レテ

此巖榿本あり有けり或音源氏曰榿葉の香を薫
 袖の香不す有る歌曰依て和名枚曰榿漢語枚云
 之岐美香木也云云木の事ありと云う彼ハ本草曰
 莽草木葉如石南其實有大毒云云如毒物云云
 上新古今集曰榿採山路露濡りしけり
 墨染手白く物に如く髪長く葦の中子と云う
 常中曰神曰祀賢木也代て榿を用ふるハ彼徒
 の風儀傳法少く者多しハ更ニ榿と為るハ
 此者を曰且右の榿葉の香を薫ハ
 何水り木も各其香有を殊ニ新芽の程あり
 其香の灼き者多水ハ強ニ
 榿を引り及ハさる事あり
 〇榿ハ第三一書ニ榿
 天香山之真坂木而有之榿字誤作を共ニ称
 許士志氏と訓ハ北古事記曰根許士志許士而
 有之依て訓ハ皇太神宮儀式帳曰天香山

立豆 榿真坂樹豆 有之第三一書と同一状古語拾
 遺ハ八 榿天香山之五百箇真賢木と有之下古語佐
 祢居自能祢居自と有之佐ハ尧語曰真と云ハ如
 一神武天皇御紀取取丹生川上之五百箇真坂樹以
 祭諸神景行天皇十二年御紀取磯津山賢木仲哀天
 皇八年御紀取取五百枝賢木 有之榿榿を
 取取 然訓ハ事多し記傳八三十一 去年春伊許自
 而植之吾屋外之若樹梅者咲尔家里と有之拾遺集
 去ハ去ハ年根許士植 直直 入入 今
 六帖曰秋野ハ根許士許士 持持 巖種 遺

一四ハ為ぬるを詠て根ふかすは採取を云ふ俗云
ふ根引は為る事あり俗に物を許し流と云ふ此より
不出つゝむと云れ又通證に引る仁和大嘗會神樂歌
は萬代を祈り懸る長岑の山の賢木を佐祿居自ら
て永仁大嘗會歌に神代より曇らぬ八咫の鏡山根許
士の賢木色も易くまゝ有り 名義抄に採取を保流又
宇賀都又久自流又比
呂布又登流又尔岐流と訓と又握を尔岐流又登流又
母都又都加年と見え振を奴久又須久布又波多加流
又阿那具流又夜波須又加祁久流又麻奴加流と訓
と字共説合せて言の義をも思ふ可き者あり又許士
は扶又攀と訓 ○上枝ハ此ハ第三一書ハ加年都延ハ
此近き語あり
有る音便あり正しくハ加美都延と訓て志母都延ハ

對ハハむ可あり此上下の對の事傳十三百十
又本都延と訓て志豆延ハ對ハハむ可ハ應神天皇十
三年御紀大御歌に辞豆曳羅波比等米那等利保菟曳
波等利奈誡羅辭と有る是より古事記ハ本都延
波登理韋賀良斯志豆延波比登登理賀良斯と有り又
其朝倉官段歌ハ本都延波阿米衰於幣理那加都延
波阿豆麻衰於幣理志豆延波比那衰於幣理と先云て
次ハ其を兼て本都延能延能字良婆波那加都延ハ
淤知布良婆南那加都延能延能字良婆斯毛都延ハ淤
知布良婆南斯豆延能延能字良婆波云云と有る本都

延と對ひたる所より斯豆延と云ひ其下句は在て對
ふ所無きより斯毛都延と云ふハ即加美都延に對ふ
語あるが故より是を以て此の上枝下枝ハ加美都延
斯毛都延と訓之第三一書の上枝下枝ハ本都延志豆
延と訓てむとす 其ハ遠飛鳥宮段ハ賀美都勢尔伊久
比素宇知斯毛都勢尔麻久比素宇知
と有る正しに對格有る依り然るを御記の訓に
上枝を四年都延と訓るが下枝を志豆延と訓るハ
格ハ外れた本都延の本ハ槍穂又福穂と云ふ穂
少と云べし 秀真又同秀と云ふ 秀の如く物の鋒ハ秀出
同ト云ふ 秀真又同秀と云ふ 秀の如く物の鋒ハ秀出
る義ある事云ふも更なり然るハ 古事記 明宮段大御歌ハ波都
延波波陀所可良気美志波延波延具呂岐由惠美都具

理能曾能那迦都延衰と有る熟思ふ日 ホツニ 上土下垣 ハツニ 中土
と云事あり物の端を波と云事 ヤニ 山端又端立るとい如
し是を以て本と波と義相通ふ事を知べきなり万葉
九二十ハ最末枝者落過尔初利 レツエ 下枝尔遺有花者十六
一ハ為妹 ホツエ 末枝梅字手折登波下枝之露尔沾家類可
南十三六ハ安利立有花橘字末枝 ホツエ 尔毛知引懸云々又
二十 橘末枝字過而此河能下文長汝情待又橘之末枝
字煩具理云々十九 ハツニ 青柳乃保都枝與治等理亦
此ハ所見たり 又十卷九下ハ打麻春避來之山際最末
末之咲往見者ハ有る最末之を比佐
歧能須惠能と訓れども最末を此佐岐と訓る事心得
ず若くハ右ハ舉たる例共ハ等しく最末末を本都延

訓多々むらど思由れと云足ず八卷十四下
打藤春來良之山際遠木未乃南往見者有之同歌
多りけりハ最木未と遠木未と
訓ふるより本都延の例は味ず ○中枝ハ那加都延と
訓ハ加美都延斯毛都延ハ本都延志豆延ハ共ハ
相並べハ外ハ換ベテ詞無分故より應神天皇十三
年御紀大御歌ハ流菟愚利能那加菟曳能府保語茂利
阿加例蘆鳩等啼ハ有ハ古事記ハ美都具理能那迦
都延能本都毛理阿迦良衰登賣衰ハ有ハ又朝倉宮殿
歌ハ那加都延波阿豆麻衰流幣理ハ本都延能延
能宇良琴波那加都延尔流知布良琴南那加都延能
延能宇良琴波斯毛都延尔流知布良琴南ハ有ハ又

△五十六小字具比
須曹奈岐王伊奴
奈流鳥梅枝志豆
延尔又ハ和家
夜度能鳥梅能
之豆延尔

万葉ハ十三下ハ仲枝尔伊加流我懸ハ唯一所ハ
有ハ中ハ上下を加美斯毛ハ訓ハ片南斯多ハ云テハ
本末ハ云ハ左右ハ異ハ又初後ハ云ハ始終ハ云ハ
と云ハ端尾ハ云ハ前後ハ云ハ首尾ハ云ハ内外
ハ云ハ別ハ云ハ事無ハ云ハ ○下枝ハ此ハ右ハ引ハ朝倉宮殿歌ハ
依テ斯母都延ハ訓ハ即加美都延ハ對ハ又志豆
延ハ訓ハ本都延ハ對ハ云時ハ事ハ應神天皇
十三年御紀大御歌ハ辞豆曳羅波比等末那等利ハ有
ハ釋ハ下枝等ハ註セリ古事記ハ志豆延波比登
登理賀良斯ハ有ハ又朝倉宮殿歌ハ志豆延波比那
表淤幣理略斯豆延能宇良琴波ハ有ハ万葉七

三十 日向圓之若楓木下枝取花待伊向尔十一九下下枝尔境有花者
 五下 枝之露尔沾家類可聞又咲出照梅之下枝十一 橘本我立下枝取十
 三下 下枝尔此米宇懸多有何水以下枝志豆
 延と訓むふふ右の十卷十三卷多共末枝對
 へたりし者多し脩上多本都延の都天津神回津
 神多の津と同一下を此の志豆延の豆ハ濁音多
 りて其との等しう若く右の上枝脩引古事
 記明宮段大御歌波都延と對して志波延と云志
 下字の義ふれは志豆延ハ下着枝の義も有下
 下を志と云ハ神武天皇御紀人各は高倉下と云有
 を以知べし尾ハ下有沈ハ下積多下字を志一言

△源氏早草殿卷の
 御心寄と云梅の
 香を衣御在す
 下枝を折して
 參給へる句の甚
 艶いふ發たきこと
 云し

云云是等の○上枝中枝下枝懸たりし物の事
 例多在可し○上枝中枝下枝懸たりし物の事
 異説多む有けし其物の異多し瓊と鏡との
 懸所の相違多し予か心より神宮の傳はると朝廷の
 傳はるとして其傳の別は成水とて所思の多し
 其ハ此より上枝懸ハ瓊之五百箇御統中枝懸ハ恐
 鏡一云真下枝懸青和幣白和幣と有を始として古事
 記より於上枝取著八尺句總之五百津之御須麻流之
 玉於中枝取繫八尺鏡於下枝取白丹寸于青丹寸于
 而見之古語拾遺より上枝懸玉中枝懸鏡下枝懸青
 和幣白和幣と有て共と同一事ハ是朝廷の傳はると所

まゝ可し其瓊と鏡の中は鏡ハし古事記は天字受
賣命の益汝命而貴神坐故歡喜咲樂と日神に申給へ
るは鏡を指し貴神と申されしより拾遺の太玉命
の吾之所捧宝鏡明麗恰如汝命乞向戸而御覽焉と申
給へるふと此の招禱より鏡を以て最重と為る所ふ
れば上枝より懸させ給ひけり然るも右の傳
共の趣は相換水なる記傳十五二十と書紀は天照太
神乃賜天津彦彦火瓊杵尊八尺瓊曲玉及八咫鏡草
薙劍三種宝物と有り此三種を連舉る次第は鏡劍玉
より鏡玉劍より有べき理なる記紀共は鏡を先

し書紀より殊に玉及鏡と鏡の上は及字をさへ置水
たるは如何と云ふ水垣朝御世に至りて此御鏡劍を
ハ佗處に齋奉り給ひてより天皇の御許に坐し神代
の舊物より坐す唯玉のみ今太御神の授賜へる任
の物より坐故は彼御世よりして三種の中は玉を
第一とす為る水けむ然水は其御代より後ハ常玉
を先と申し習ひたる其次第は任に此記も書紀も記
せざる者ありて神代のみ然るも水けむと云水た
る如く意味有て授意に故むと無水とも中古より
玉を先と申習ひ來つるに引れて中枝よりけむ玉の

思えず上枝の方で成れる者こそ了ら所見たりけれ
 景行天皇十二年御紀より上枝挂八握劔中枝挂八咫
 鏡下枝挂八尺瓊と見え仲哀天皇八年御紀より所見た
 り固縣主祖熊罴が奉水より上枝挂白銅鏡中枝挂
 十握劔下枝挂八尺瓊と有り伊親縣主祖五十連手
 奉水より上枝挂八尺瓊中枝挂白銅鏡下枝挂十握
 劔と有り一八咫鏡瓊一八鏡劔瓊一人瓊鏡劔にて
 定れる例無が如しと雖も又第三一書より上枝懸以
 此より其趣別あり
 鏡作遠祖天板戸呪已疑戸邊所作八咫鏡中枝懸以玉
 作遠祖伊弉諾尊兒天瑠玉所作八坂瓊之曲玉下枝懸
 以粟国忌部遠祖天日鷲所作木綿と所見たり皇太神
 宮儀式帳山向物忌職掌條に天香山に立豆握真坂樹
 豆上枝懸八咫鏡中枝懸八尺瓊乃曲玉下枝懸天眞麻

木綿太玉串止号之と見えたり傳と合ら神宮より
 八其招禱の御鏡の神代の舊物に任じ御在し坐す故
 一本の神代の傳に如く鏡を先より瓊を後より為す真
 の古説に存れる者あり可し猶皇太神宮祢垣譜圖帳
 にも上枝波天板門加作流八咫鏡表懸中枝波天明
 玉加作流八尺曲瓊表懸下枝波天乃香豆比女加作
 留真蕪乃木綿着豆と有り共此の第三一書の趣も
 同しなり此を取れるも彼に依れるも非ざるなり
 も神宮の傳に於る古義と全く合はれ此傳の正説を
 かり可く所思えたり
 舊事記にも上枝懸八咫鏡中
 枝懸八坂瓊之五百箇御統之

玉下枝懸青和幣白和幣と有、第三一書を取れ、
水どし然と心有りの所為、
難く侍りふむ又神名秘書、上枝懸玉中枝懸鏡、
下枝懸青和幣白和幣と有、
て神宮傳ハハ、
右件鏡ハハ掛、
神ノ御靈形と成、
其位正ニ上枝ニ在、
時日天璽とシテ奉、
御許離ナセ御在、
の大御璽ニ渡、
御事ハ申、
宣ハ、
神形代、
及、
瓊ハ

鏡の次ニ在、
下枝ニ取懸、
何れノ傳、
丁、
ハハ、
鳴尊ノ御功、
招禱、
之、
以テ行、

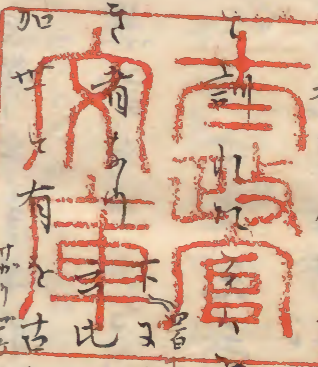
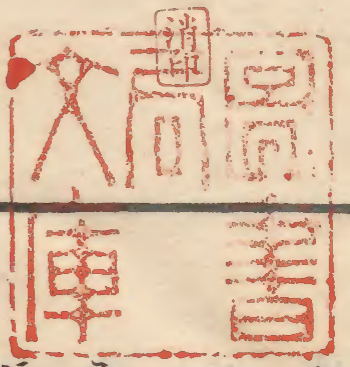
在けむ状を曉る可くまむ有ける然る古事記焉天
 降段は其遠岐斯八尺勾璉鏡と有て其及字を思て
 して次は草那藝劔を別て為る此より已は落亡せ
 て後素戔嗚尊の奉る世給へる物あり其神の御
 靈として天降し給へる故に此時は鏡璉共のこ一
 時こ成水々者あり有水とも遠岐斯と云ふるなり
 此を以て此より下枝は唯青和幣白和幣のこ有し
 趣は傳へたり者ありなり劔の素戔嗚尊の御靈は
 儀式帳の始に此掛畏天照坐太神月讀大神二柱所祈
 伊弉諾尊伊弉册尊共為夫婦合所生神御形鏡坐と有
 日本武尊の東征に出坐し時御姨倭姫命より賜
 へる遠草薙劔の神宮に御在し坐ける傳の遺水々も

皇太神宮儀式帳
 八尺勾璉の曲玉と見
 え此を

了己は熱田宮に所祭水々故に其素戔嗚尊の御形
 の事ハ略載せず唯伊勢に遺止る世給へる皇太神の
 御形鏡坐と云て餘事を漏る者あり故に熱田神宮に
 ても天照太神素戔嗚尊二柱を神劔の御靈として祀
 祭れる是より宝劔出
 現章に云を見たり可し ○八尺璉之五百箇御統ハ公口訣
 貴璉也と有り已は傳十五 百八十七 十九 等と云り
 此作者の事第三一書に玉作遠祖伊弉諾尊見天明玉
 所作八坂璉之曲玉と見え又古事記に科玉祖命令作
 八尺勾璉之五百津之神須麻流之珠と有り又古語
 拾遺より令櫛明玉神作八坂璉五百箇御統玉と見え
 皇太神宮社亘譜圖帳より右に第三一書に同く天
 明玉加作流八尺曲璉と有る如く皆共日同神に造給

入る所あり 舊事記より今玉作部遠祖豊球玉屋神造
 玉祖命と申す 玉者有り但古引る如く豊玉命と
 少傳十七卷九下羽明玉神下日云るを見る可し
 ○懸を此より獲る 登理加和訓を改めて登理都氣
 加和 有を改めて登理加和 訓と青和幣白和幣の所より登理志殿氏と訓
 本の任は後入る古事記は取著又り取繫又り取
 去の字を用ひて書別るはたよ因り此は取字を
 訓添 六下 万葉一 二十 海中幣取向而ふと云る
 取の意より記傳八 三下 取著八尺勾瓊之五百津之布
 須麻流之玉の下日万葉三 三下 奥山乃賢木之枝尔
 白香付木縣取付而又十七 四下 之良奴里能鈴登里

都気底より有りて云はたる如く此物を取て彼
 物に著るを云より 此より懸字より更なり第三一書は
 登理志殿より訓と然る事より有はれ今一登理
 都気より訓無き古事記は引合せて訓の中より取著は
 富る訓を偶 取繫ハ万葉三 三下 日手弱女之押日取懸
 漏せるより 十三 十七 日木綿手次肩荷取懸又 二十 曾朋舟尔綱取
 繫十六 八 日真十鏡取雙懸而十九 三下 日木綿手次肩
 掛傳文幣字手尔取持而ふ見えれは此より懸字
 をも然訓付れるは後不可 此取 懸とハ木枝日鉤下たる
 を云より古事記玉垣宮段日山代国相樂時取懸樹
 枝略故號其地謂懸木 今云相樂と有を和名抄郡名



△神子左加支波尔
由不止利志天人多
加與二加之美能
年呂子伊波比
所女介介年

山城用桐葉佐加良加有依下記傳懸木佐賀
理紀
不可者
流字加
物
可
枝葉懸挂木縣万葉六三十一
齋戸尔木綿取四手而忘日管延喜六年日本紀竟冥得
太玉命物部安興歌比佐嘉多能阿麻豆流呵美字伊
能留度曾要多母須惠二尔奴佐波志互氣留与有
又神樂採物歌賢木葉木綿取矣誰代之神

